［成果情報名］碾茶と蒸し製玉緑茶の交互生産の有効性

［要約］碾茶と蒸し製玉緑茶の生産を交互に行うと一番茶生葉収量の維持ができ、「粗収益－製造コスト」の４か年合計金額は、碾茶のみ生産を行う場合より 16%増加する。

［キーワード］碾茶、蒸し製玉緑茶、一番茶、二番茶

［担当］長崎県農林技術開発センター・果樹・茶研究部門・茶業研究室

［連絡先］0957-46-0033

［区分］茶

［分類］普及

［作成年度］2021 年度

［背景・ねらい］

近年、日本茶の消費が低迷する中、抹茶の需要は拡大しており、本県でも新製茶ハイブリッドラインや煉瓦式碾茶炉が稼動している。

本県茶産地は主に蒸し製玉緑茶の産地として発展してきており、抹茶の原料となる碾茶栽培技術は確立されていない。碾茶は、生育期間が長く、茶園からの窒素収奪量が多いこと、寒冷紗による長期間の被覆を行うため、樹勢の低下・翌年以降の収量への影響が懸念される。

そこで、長期間の被覆が収量に与える影響を明らかにし、碾茶生産と蒸し製玉緑茶生産を組み合わせることによって収量が安定した被覆サイクルを確立する。

［成果の内容・特徴］

1．一番茶生葉において「碾茶のみ」生産を行った場合、「碾茶と蒸し製玉緑茶の生産を交互」行った場合と 2018 年の生葉収量は同程度であるが、2021 年には「碾茶と蒸し製玉緑茶の生産を交互」に行った方が多くなる（表１、図１）。

2．一・二番茶の「粗収益－製造コスト」の金額を検討した結果、「碾茶と蒸し製玉緑茶の生産を交互」に行った方が、「碾茶のみ」生産を行った場合より 2019 年～2021 年にかけて金額が高くなり、４か年の合計金額は 16%増加する（表２）。

［成果の活用面・留意点］

1．抹茶は、「碾茶(覆下栽培した茶葉を碾茶炉等で揉まずに乾燥したもの）を茶臼等で微粉末状に製造したもの」と定義されている（日本茶業中央会「緑茶の表示基準」）。

2．供試品種は樹齢 14 年生「さえみどり」を用いた（令和３年度時点）。

3．碾茶栽培における長期被覆は、1.5～2.0 葉期に遮光率 85%の寒冷紗（ブラックメタ(株)日本ワイドクロス）で一番茶 20 日間、二番茶 14 日間程度の被覆を行った。

4．蒸し製玉緑茶栽培における被覆は、3.0 葉期に遮光率 85%の寒冷紗（同上）で一番茶 9 日間、二番茶 7 日間程度の被覆を行った。

5．年間窒素施肥量 50Ｎkg/10a で栽培した茶園の結果である。

6．供試茶園は 2015 年に中切り更新を行い、更新４年目以降の試験である。

［具体的データ］

表１　試験区の構成

試験区	2018年		2019年		2020年		2021年	
	一番茶	二番茶	一番茶	二番茶	一番茶	二番茶	一番茶	二番茶
碾茶のみ	碾茶	碾茶	碾茶	碾茶	碾茶	碾茶	碾茶	碾茶
碾茶と玉緑茶	碾茶	碾茶	玉緑茶	玉緑茶	碾茶	碾茶	玉緑茶	玉緑茶

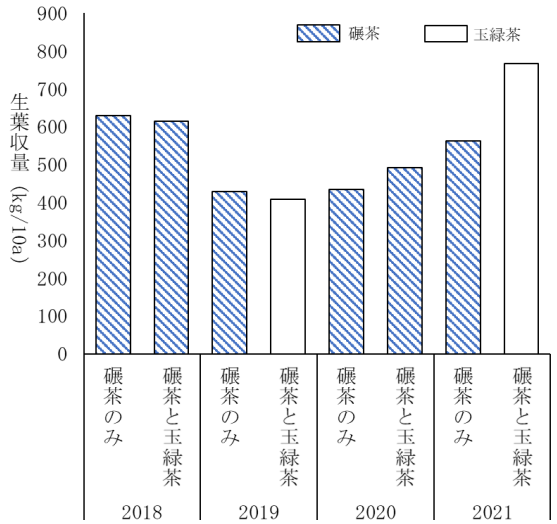

図１　2018 年～2021 年　一番茶生葉収量（kg/10a）

表２　一・二番茶合計「粗収益－製造コスト」シミュレーション（千円/10a）

試験区	年次				合計	合計指数
	2018	2019	2020	2021		
碾茶のみ	442	301	328	402	1473	100
碾茶と玉緑茶	437	329	371	568	1705	116

注１）平均単価は「碾茶」で一番茶 4,230 円/kg、二番茶 1,193 円/kg、「蒸し製玉緑茶」で一番茶 3,589 円/kg、二番茶 1,016 円/kg である（令和３年度　西九州茶連聞き取り）。

注２）製茶歩留まりは碾茶 15%、蒸し製玉緑茶 20%、荒茶の製造コストは碾茶 208 円/kg、蒸し製玉緑茶 147 円/kg である（碾茶：令和３年度　県内農家聞き取り、蒸し製玉緑茶：平成 31 年度長崎県農林業基準技術より）。

注３）粗収益は一番茶、二番茶の生葉収量を製茶歩留まり及び平均単価で乗じたものである。

注４）合計指数は「碾茶のみ」を 100 とした時の指数。

［その他］

研究課題名：多様なニーズに対応した原料用茶葉栽培技術の開発

予算区分：　県単

研究期間：2018～2021 年度

研究担当者：柿山息吹、藤井信哉、中尾隆寛、寺井清宗